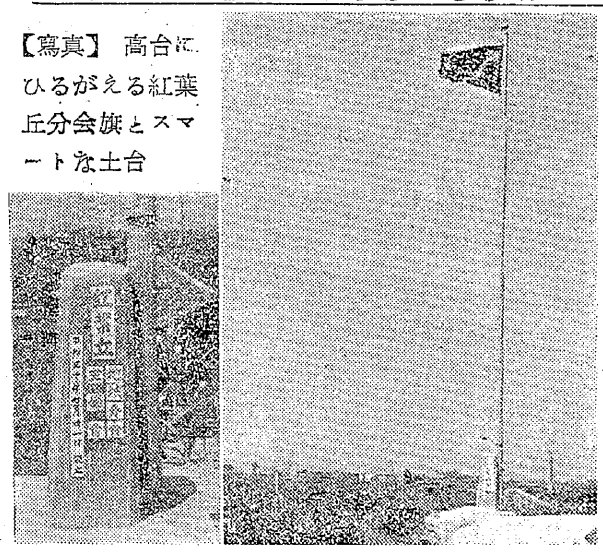
地域自慢の掲揚臺

紅葉丘の高臺に完成

宮浦支部紅葉ケ丘地域分会には最近高さ四十尺余の堂々たる掲揚台が出現、大牟田市街を見おろす紅葉ケ丘の高台に分会旗がへんぽんと翻り、附近の朝日ケ丘、月見丘、馬渡、天道の各社宅はいうに及ばず、勝立地区に一歩足を入れると高台に真赤な分会旗がヒラヒラとヘタメイテいる光景が目に入り、地域分会の健在を無言のうちに示しており分会自慢の一つとなり同地域社宅周辺に異彩を放つている。この分会旗掲揚台については昨年ごろから建設したらという声が一部から起つていたが、今年の地域大会でついにこれが実現をみるに至り、二千円という予算も組まれこの提案の決定を見た。

早速器材の買入れや工事が計画され分会全員の汗を流した労力が傾けられ、これにまた主婦会の方からも湯茶の接待など惜しまざる協力があつて何一つ支障もなく工事の進行をみた。基礎工事も本格的なもので地下六尺鉄筋のコンクリートで固められ土台にはタイルを埋めこみ地域分会と主婦会の名前が鮮かに記され、加えて社宅中心部の高台に勝立地区を一望することの出来た地の利を得た場所に建設され、地域の人たちもこの掲揚台だけは支部のものより格段の出来栄えがよいと自慢しており、完成式を兼ねて最初の分会旗掲揚が去る三十一日の日曜に行われた。これについて那須分会長も各方面からの協力に非常に感謝している。この旗の下に結集して旗を中心に団結を固めて前進、天下に市民へ呼びかけて平和を訴え多数の人の署名を得た。



【寫真】高台にひるがえる紅葉丘分会旗とスマートな土台

巡りきた八月六日

「平和のタベ」笹林公園で盛會

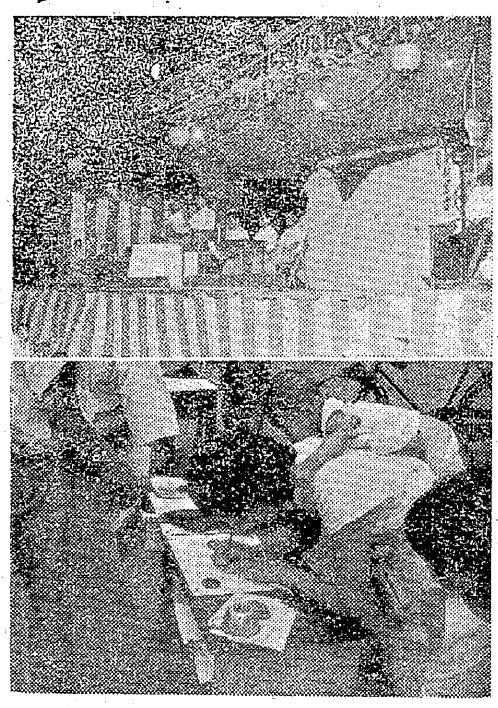
平和を大牟田から世界へ

「安らかに眠つて下さい。あやまちは繰返しませんから」……原爆が投下されてから早くも十年の歳月が流れ、広島に原爆が投下され一瞬にして二十余万の同胞を惨殺したあの呪うべき八月六日が十たびめぐつてきた。

この日広島では平和を希求し二度と原爆の惨禍を繰返したくない各国からの代表や日本の各層からの参加者で盛大に世界平和集会が開かれたが、大牟田でも市主催の午後七時から笹林公園音楽堂に仮設舞台を設け、一万人の参加を得て「平和のタベ」を開催し当時をはるかにしのび新たな平和への心を燃やして平和のタベにふさわしい数々の踊り、映画で夏の夜を盛りつぶした。

大会は華やかなデコレーションをした舞台に後の方に大きな平和を象徴する鳩の姿を描いた中に三鉱出身職員の月足、川畑、徴発の三島氏の顔長で、平和の声を大牟田荒尾市長の姿があつたのも印象に残つた。

細谷市長の平和の為に礎石になろうという呼びかけも一入みんなの胸に刻まれ、つづいて平和宣言が読み上げられて更に平和への決意を新たにした。



【上】会場で力強く讀みあげられる平和宣言【下】子供を背負つた主婦も喜んで平和の署名を

幕を開き、来賓の中にお隣りの坂から全世界へ拡げようとの挨拶で手餅婦人会の踊るガタイネ踊りを始め三鉱からも四山主婦会の人々が踊りを披露、多彩なプログラムを展開した。

なお最後に映画「永遠の平和」「足摺岬」を上映し記念すべき一日を終つた。

なおこの日午前九時から大地評の主催で市内七ケ所に分れて原子兵器使用反対の署名運動を展開、炎で、この他地域での諸行事なども

保安對策を

港務荷役で徹底究明

七月二十八日午後三時五十分ごろ港務所荷役課細積手森常山さんは荷役課雑貨係で本船に硫安荷役作業中、硫安を積んであるモッコの移動を有蓋車の脇に退避したところ、アッと云う間に車とモッコに胸をハサマれ、同僚が気付いてかけつけた時は胸に傷を負つておれていた。

怪我をした森さんは同僚達の手で病院へ直ちに運ばれ応急手当を終え入院した。

医師の言葉によると傷の程度については内出血はしていないといつており、だいたい今のところ数ケ月ぐらいでなおると思われるが森さんがどうしてこの様な怪我をしたかについて職場では大衆討論（分会）を行つたところ、作業開始前に本船を前進（五メートル位）させてもらいたいとタントウ職制に分会では要望していたが、保安を第一に考えず、作業場所がせまいのに作業能率のみを考えたためこのような事故が起つたとの結論が出て、今回行われる現場係の事故の対策機関において討議することになつた。（港務発）

拡声機など寄贈

西町渡さんら18名

三川支部西町地域分会には今度真新しい拡声機（十六吋）とアンプ一式の寄贈をうけ、分会長以下地域役員を感激させており、これで今后地域活動のために万全の威力を発揮されると喜ばれておる。

この拡声機の寄贈者は同分会渡清実さん以下十八名の人たちでこの分会が発足以来今日まで一致した団結や分会員と役員との密接した融和は他分会もうらやむ程のもの

主婦会と一体となつてスムースに運営されるなど、地域活動に大きな成果を収々とおさめているのでなおこの上も地域の活動のために前記の人たちが尊い金を出しあつて思い立つたもので、丁度学童の夏季学習の規律正しい生活の一環として始つたラジオ体操の為には拡声機が必要である、それとともに地域の諸活動にも使用して頂き成果を挙げてもらいたいと寄贈されたものである。

早速この拡声機は今始つている朝のラジオ体操にリズミカルな音楽を鳴かせて大いに活躍しており、今後同地域での活動に威力を発揮することになつた。

宮崎地域分会長談

私たちとしてはこの寄贈には非常に感激しています、この行為に対してより一層組合のため地域のため全力を挙げて頑張ろうと役員一同も張切つています。

この分会は発足以来何のトラブルも起らず主婦会共々和気あいあいのうちに前進を続けており分会長として非常に感謝しています

寄贈者　渡清実、原野光治、岩宮五二、畠山善七、岡小太郎、久永愛蔵、流矢徳松、大塚清喜、友後治、秋吉益己、関作道、後藤重行、鬼塚英敏、荒木正則、樋口師治、亜本地邑、坂本茂、田中常夫氏。

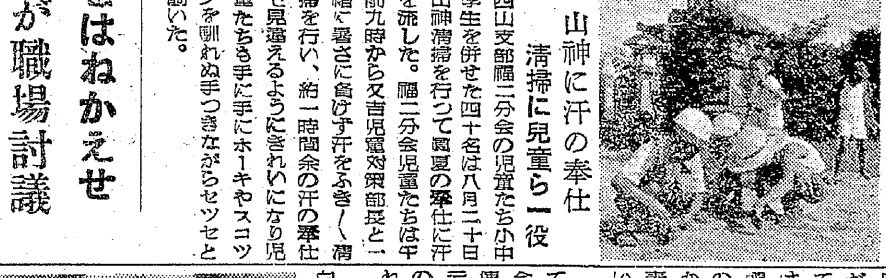
職制の不合理をはねかえせ

操車手が職場討議

港務支部の操車ではいま職制はねかえし闘争の一環として、いままで職制による一方的な天下り式の不合理の存在する個所などを職場大会で協議して改めて行こうと討議されている。

操車手という職名は現在非常に広範囲に分れており、例えば旗を振る信号手、本駅の助手、駅のリーベ係など各方面に分れており、このため同じ職名の操車手といつても作業密度や労働条件は非常に違つており、加えて新期採用が全然なく新しい人が入つて来ないため同じ業務を同一人が何時までもやつており、条件のよい人と悪い人とでは相当の開きがあつていた。

このためいままで鬼角行われていた職制に気に入られるものは配置のとき良い条件の所にやられ、これと反対の立場のときは悪い条件の下に配置されるという不合理な面も現れていた。このためこの配置をめぐつて職制のつけこむ悪い面を改良しようと職場大会を行い現在盛んに検討が行われている。



山神に汗の奉仕

清掃に児童ら一役

四山支部福二分会の児童たちは中学生を併せた四十名は八月二十日山神清掃を行つて真夏の奉仕に汗を流した。福二分会児童たちは午前九時から久吉児童対策部長と一緒に暑さに負けず汗をふき〳〵清掃を行い、約一時間余の汗の奉仕で見違えるようにきれいになり児童たちも手に手にホーキやスコップを動れぬ手つきながらセッセと働いた。

心温まる仲間愛

續けられた病氣見舞

旧い職場の友が病いを得て一人淋しい療養生活を続けているのを、同じ職場の人たちが励まし慰め合つて一日も早く健康体になるよう毎週欠かさず見舞を行い、この美しい仲間愛が一年近い歳月すつと続けられていることが最近明るみに出て明るい話題を投げている。

話題の職場は三川鉱調査で、この調査で以前同僚と仲良く働いていた原田茂さんは一度胸をやられ銀水園入院、療養を続けていたが回復に向つたので退院、家庭療養を行つていた。この当時丁度三池に旋風を巻いたあの三井の企業合理化の首切りがあり原田さんも病弱のためついに退職したが、これが非常なショックとなり病状が悪化し再度銀水園に入院した。

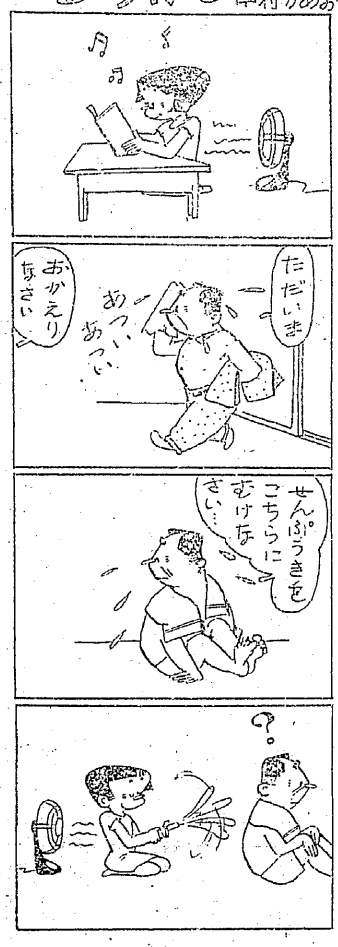
その後一時は危篤状態にまで至りこれを聞きつけた調査の人々はとるものも取りあえず同氏を見舞つたが、淋しい療養生活を続ける原田さんに同情、それ以後誰がいうともなくずつと見舞が続けられ今日まで及んできた。

また当時調査で働いていた人々は三十名近くいたが職場の移動などがあり現在は係員の池田さん以下十九名になつているが、他の職場に散らばつている人たちもこの十九名を中心として見舞品を贈つたり、見舞に行つたりしており、一日も早く昔の仲間が病魔から逃れることを祈つている。

このことが最近明るみに出て聞く人の胸に心暖い風を吹き入れている。

連載漫画 NO 27

3ちゃん　中村かめお



農業博覧会を見る

組合長　歐亞旅行記（24）

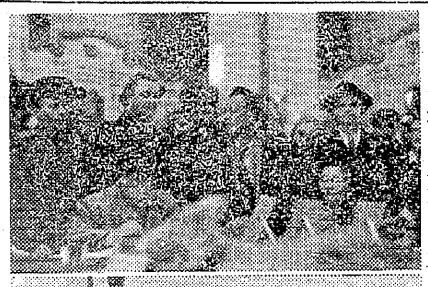
われ〳〵はソ連の農業博覧会を見学することになつた。われわれが見学した農業博覧会は新設されて間もないものであり、日本に於ける既成観念でわれわれはそれを頭に描いていたので案内されたその個所に行つて見て、ちようと驚かされた。何しろ博覧会の中には素晴しい洋館建が沢山建てられている、その面積は非常に広い。

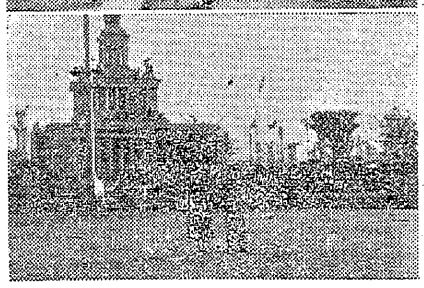
八月一日に開館され現在に至つているということであつたがこの会場の総面積は二百六町歩七十六畝の洋館建、取扱件数三百六件と云うことであつた。本館というものがあつてこれは十六共和国、それぞれ別々に建てられている。

例えばウクライナ共和国館とか白ロシヤ共和国館等々十六の共和国館が独立して建てられ、しかもそれ〴〵の館はその地方民族の特有の色彩或いは建築方式というものを取入れてつくられている。

その他の専門的な館が四十六棟あつてその中には農業機械化館、畜産館などいろ〳〵あり、植物館を例にとると、大体の面積が百四十六町歩で、その中に密林が八町歩、花の種類が五百万、或いは五十万本の溜木、五万本の大木というように相当豊富な植物が寄せられている。何しろこの会場の中にバス路線があり、皆これを利用するというほど広い。

この博覧会は恒久的ものであると聞いて、われ〳〵は非常に驚いた。日本国は人を寄せてそれによつて金儲けをしようというのが博覧会の定義のようになつている。





が、ここは全然そういうことはなく、博覧会の真の意義は農業の実態、農業に対する知識を学生或いは労働者、市民に認識させるということであり、その最も大きな主眼は農民の教育ということに置かれている。

十六の共和国で出来たそれぞれの生産物を陳列して、しかもその生産物の収穫までの過程というようなものを具体的に説明してあるお互いにそれぞれの共和国でどのような成績を挙げているかを勉強するために農民は二ケ月間もこの博覧会に滞在して研究して帰るそうである

陳列されているものより成果が上つたならば、その新しい出品と取替えて行く。そういうようにして次々と代えて行くという仕組みになつている。

従つて博覧会の中には研究室もあり、その方面の権威者の講演も開かれることになつている。この博覧会を全部見るには少くとも二ケ月はかゝるだろうということであつた。われ〳〵はそういう大きな規模外観を見て時間もないので二組に別れ、私たちはカザコツク共和国館を見ることになつた。

このカザコツクは東洋民族である、一九二〇年に自治を終りその後の努力した一切の農産物が陳列され、いずれもわれ〳〵がびつくりするような大きなカボチヤ、或いはリンゴなどもあつて、われわれはリンゴを試食した。（写真上はカザコツク館で見学所感を書く相沢団長・下は農業博覧会場）